図書館年報（平成 21 年度）巻末資料②　（阪南市子ども読書活動推進計画の動き）
『子どもの文化』2010.1　P.16～P.23　掲載記事

子どもの生きる力を育む読書推進活動をめざして！

釣舩廣子（阪南市みんなの図書館を考える会）　（第一章）
筒井惇美（阪南市子ども文庫連絡会）　（第二章）
永橋ひかり（阪南市立図書館）　（第三章）

第一章　阪南市子ども読書活動推進計画ができるまで

答申から子ども読書活動推進計画へ

２００４年６月阪南市立図書館協議会は、図書館長より「今後の阪南市立図書館はどうあるべきか」という内容の諮問を受けました。その後協議会では、小委員会を立ち上げ、２００６年９月までに、小学生（４～６年生約１６００名）と中学生以上大人（約６００名）を対象に読書状況や図書館利用状況を知るためのアンケートを取り、集計作業を行いました。その結果を資料として、法令や条例など重要な観点を踏まえた上で、公立図書館建設に至る運動、子ども文庫・おはなしの会・読書会の活動、また新たに始まっている図書館サポーター活動など、阪南市に根付いている市民活動を取り上げ、指定管理者制度導入ではなく「市民参画の象徴としての図書館を行政、市民が手を携えて、構築していくことを提言したい」という旨の答申が提出されました。

この答申は、一つは「指定管理者制度導入について）であり、二つ目には「子ども読書活動の推進に関する施策」を急ぐようにと要望する内容のものでした。そして提出一年後の２００７年１２月、「阪南市子ども読書活動推進計画策定検討委員会」の発足へとつながっていきました。

策定検討委員会は全体会と四つの部会で構成

まず委員として学識経験者１名、行政職員１２名と市民団体から４名、市民公募により２名が任命されました。また事務局として市立図書館司書５名が参加し、委員会が始まりました。

部会は「家庭・地域部会」「乳幼児・幼児期部会」「学校部会」「図書館部会」」に分かれ担当課職員と市民、司書５～６名でそれぞれ話し合いが進められました。

議論の中で見えてきた問題点

最初に現状と課題、そして今後の取り組みという順序で、活発な議論を重ね、

時には持ち帰りまた持ち寄るという方法も取りながら文章化していきました。その中で部会を越えて大きな問題点が見えてきました。

それは子どもの読書を推進する立場にいる多くの大人が「読書離れ」をしてしまっているという現実でした。特に家庭ではまず「親」に対して、学校では「教師」へ読書の大切さを伝えていくべきではないか…。今の暮らしの中で、神経をすり減らしている大人たちこそ、感性や心のゆとりを再生するために本を楽しむ時間をつくってほしいと切実に思いました。

また学校部会では、読書に対する価値観の違い、ズレがはっきり現れ、どの教科にも基本的には読書の力が大切であることを理解してもらうことの難しさに、頭を抱えたこともありました。

「はじめに」に込めた委員たちの思い

素案として４部会の内容が出揃ったところで、全体会では「はじめに」の作成に入りました。ここで中心になったことは子どもの生きる力と読書の関係、それを阻むメディア。その結果外遊び、人間関係、自然の中での体験が不足しているという子どもを取り巻く環境が浮かび上がってきました。

私たちは子どもが人間として成長し一人ひとり輝いて生きるためには人間関係の体験、自然体験、そして読書体験が必要ではないかと考えています。

ここで「はじめに」の全文を引用します。

> 子どもの生きる力を育てるには〈人間関係の体験〉、〈自然体験〉、そして〈質の良い読書体験〉が欠かせません。
>
> 質の良い読書体験は、成長期に不可欠な感情体験を与え、心を充足させます。あきらめず困難に向かっていく偉人（伝記）、自分と同じように思い悩みながらも前に進んでいく主人公（物語）、想像もつかない自然の不思議（図鑑）。子どもたちが本の中で出会うものは、子どもたちが成長していく上で、糧となり、友だちとなり、心の支えとなり、生きる力となります。幼い頃から育てられたこの読書力は、一生涯にわたり、その人を励まし慰め、自己を変革させ、前に進ませてくれます。本は無限大の力を持っています。
>
> ところが一方現実の社会を見ると、少子化、核家族化で、さらにゲーム・テレビ・携帯電話やインターネットという一見便利な生活機器の普及によって、読書の時間どころか、家庭で会話する時間すら減っているのではないでしょうか。
>
> 人として生まれ、人として生きていくためには、言葉はとても大切です。
>
> 自分の思いを細やかに伝えるために、事実を的確に伝えるために、また相手をよりよく理解し互いに尊重しあうためにも言葉の力が必要です。特に乳幼児期は言語発達に重要な時期であり、テレビ試聴の影響については親や社会が認識し対処しなければなりません。
>
> そこで、私たちは、子どもと本の橋渡しをするだけではなく、社会的環境を視野に入れ、子どもに関わるすべての機関・人との連携を目指します。
>
> 平成１３年１２月、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行され、平成１５年１月、「大阪府子ども読書活動推進計画」が策定されました。本市でも、本と仲良くなる子どもが一人でも多く育つ環境を整えるための計画とし

て「阪南市子ども読書活動推進計画」をここに策定しました。

行政と市民による手作りの計画策定へ

このように、子どもの読書活動を推進するため、子どもの生きる力を育てるという原点から考え、自分の言葉で表現し計画作りを進めてきました。

これまで各自治体で様々な計画が立てられていますが、ほぼ完成されたものに市民の意見を取り入れるという方法が多く見受けられました。今回の計画は２６回の委員会を経て一字一句委員たちの考えを表すことができました。

でき上がった素案は「パブリックコメント」にかけられ、４名の市民から出された意見について各部会・全体会で検討の上、修正し、素案として完成しました。

これまでまとめ役として委員長・副委員長を市民が務め、行政と市民の連携により手作りの計画が２００９年２月策定されたことに、やり遂げた喜びを感じています。

今後、次の段階としてこの計画の進行状況を評価し、さらにどう進めていくかを考える推進会議が、今年度中に発足されることを求めています。

第二章　阪南市の子ども読書推進活動の現状と課題

阪南町子ども文庫連絡会の活動から図書館開館へ

当市では、すでに１９７０年代から文庫活動が始まっていました。１９８４年には町内の子ども文庫やおはなしの会など２０近くものグループが集まって「どの子にも本との素晴しい出会いを！　子どもが育つ、大人が育つ、地域が育つ」を目的に子ども文庫連絡会が結成され、活発な活動が始まりました。この目的達成のため、公立図書館建設を求めての要望書提出となり、１９８９年１１月に住民が待ち望んだ町立図書館が開館。昨年１１月に開館２０周年を迎え、多くの市民団体との共催で様々なイベントが行われました。中でも板倉徹和歌山県立医科大学教授の「子どもの脳が危ない！　赤ちゃんから大人までの読書のすすめ」の講演は、今の子どもには、実体験が欠けている。視覚に頼りすぎた生活では脳は萎縮する。読書の「場面想像」で脳全体が活性化する。といった内容で、読書活動推進計画を後押ししてくれるものでした。

子ども文庫とおはなしの会

図書館開館から今まで、市民の子ども読書推進活動は絶え間なく続けられてきました。現在、少子化の影響で文庫の数や來庫する子どもの数は減ったものの、市からの助成を受けつつ７文庫が健在。地域の福祉団体や子ＮＰＯ等他の団体とネットワークを組み、各々独自のやり方で頑張っています。世話人の年

齢が高くなり、なかなか若い世代にバトンタッチできないのが課題です。

一方、おはなしの会は十数年前には市内全幼稚園・小学校におはなしを配達するシステムを確立。子どもたちが本当に面白いと思えるおはなしや本に出会った時、いかに集中して聞き入るかを、現場の教師に認識してもらえることに成功しました。また、図書館や公民館、保健センターでは乳幼児対象のおはなし会を開き、赤ちゃん絵本やわらべうたの普及にも努めています。

小学校三校ＰＴＡ有志読みきかせの会

２１世紀に入り、いくつかの小学校で読みきかせの会が始まりました。毎月、図書や朝読書の時間を利用して行われています。学校図書館司書と連携することで、学校図書館の様々な問題点にも気づくことになり、我が子がいる学校の読書推進に気持ちを向けていくといった効果も出ています。

自然と本の会

１３年前から読書力とはイメージし、自然の神秘と不思議を感じる力だと考え、ブックトーク等も行っているこの会は、小学校の地域環境学習に協力しています。観察したものに関する本への関心度は高く、子どもたちは生き生きと本の説明に聞き入っています。

学校図書館司書

小中学校図書館司書は、全校配置とはいえ２校兼務です。非常勤職員の身分では、残念ながら十分な仕事ができない現状です。学校図書館の本も調べ学習用だけでなく、読み物の本も含めてニーズにあった本が少ないのです。学校図書館専任司書の１校１名配置が切に必要であり、保護者の認識と要望、そして教師自ら学校図書館を本気で改革しようとする気持ちが、この子ども読書活動推進計画を機に、高まってほしいと願っています。

阪南市みんなの図書館を考える会

この会は、町立図書館開館前の６月に発足し、昨年２０周年を迎えました。当初は、図書館協議会に参加するための学習の場と考えていましたが、「図書館や建物はできても、そこに魂を入れるのはこれから」と知り、本格的に活動を始めました。図書館が住民にとってなくてはならない施設に発展するようにと願いながら、学び発信してきました。その中で、当時活発に活動していた「住みよい阪南を考える会」と連携し、要望してきた分館建設が実現できず課題として残っています。館内には大勢の人が訪れている様子を見ると、市民の暮らしに根付いたことを実感します。これもこれまでの図書館職員の情熱と努力が実を結んだ結果だと、心より感謝したいと思います。

市立図書館主催ボランティア養成講座

「子ども読書活動推進計画」の精神である子どもの生きる力を育てる読書力をつけるため、また次世代人材発掘のためのボランティア養成講座を図書館と市

民との協働で始める時期に来ていると思います。

第三章　計画策定後の動き

「子読推」ができるまでの過程、そしてその土台として３０年以上前から子どもの読書のために活動していた市民の働きは以下の通りです。事務局として、また策定した計画の要となる図書館の司書として、策定後の１年弱の間に、図書館ではどのような推進活動を実践してきたかを報告します。

１広報（計画・計画推進のための広報）

①市の「広報はんなん」５月号に掲載。

②館内に「阪南市子ども読書活動推進計画」が策定されたことを掲示。

③要約版作成、館内で配布。

④阪南市のホームページに掲載。

⑤家庭・地域用特別資料作成。

４部会(家庭･地域、保･幼、学校、図書館)のうち系統立った｢組織｣のない、「地域」へのアタックは難しい。そんななか、一市民から｢機会あるごとに、じかに子どもにかかわる大人の手に､子読推のとっつきやすい資料を渡していきたい｣とありがたい要望を受け、独自に考え直す必要性を痛感。要約版だけでは、項目が省略されすぎるので、元委員さん２名の協力を得て、編集作業を進め、要約版に挟み込む形で作成。

⑥｢家庭読書の日｣スタンプカード作成、配布。

２図書館来館者への働きかけ

①「家庭読書の日」スタンプカードによる読書推進

子読推で毎月２３日は「家庭学習の日」と制定したものの、誰がどのように取り組むことになるのか見えないため､まずは図書館として発信できる形を考えました。｢２３日｣に本を借りたり読んだりしたらスタンプすると宣伝し月ごとにと自己申告してもらい、カウンターにてスタンプをしました。

しかし、「スタンプが埋まったら何かくれるの？」と子どもに聞かれたのですが、想定していませんでした。そこで、「としょかんすごろく」「てんてんつなぎ（順になぞっていくと当館の貸出券に載っている絵が描き出される)」「としょかんオリジナル千代紙」等数種類作成するように現在企画しています。

②｢あいことば★大さくせん｣の実施

図書館員「ぐりと？」→子ども「ぐら！」。絵本の題名を言うと、カードにチェックしてもらえ､たくさん言えたらご褒美のスタンプを押してもらえるという企画を考えました。すぐ近くに、答えとなる絵本（１０種類)を展示。その場で読んだり、借りていったりできるようにしました。狙いは、「図書館の

人と話すことに慣れてもらう」＝普段から本のことを尋ねやすくしたい、「名作絵本に親しんでもらう」という２点。特に図書館の人とのハードルを低くすることについては、「子読推」の図書館における取り組みにあがっている。

また、その後グレードアップし、裏面に全十点の紹介文等掲載。自分一人でもクイズができ、有名絵本の資料としても生かせるので、引き続き館内で配布しています。

③利用者参加型。特集「この人が、すき！」（児童書）

単なるお客さんではなく、「参加」を楽しみ、より主体的に図書館を「自分の書斎」と感じてもらいたいと考えた企画。読者による、読者が薦める「おもしろ主人公」や悪役脇役紹介文を募集しました。大人の参加も可。期間は「子読推」成立直後の３・４月と夏休み後の９・１０月に行いました。他の行事が立て込んでいたので募集が思うに任せなかったのが残念。

また、開館２０周年記念日を意識して、１１月に実施しました。児童コーナーの特集棚に、年齢別に書評を掲示、「ちいさいひと向け」「小学校１・２年」「小学校３・４年」「小学校５・６年」「中学校以上」の５区画に本を展示。「面白い本」だけにすぐに本棚が空になるのが悩みの種でした。

④２０周年記念配布物

「１１月３日は阪南市立図書館の誕生日」行事に合わせ、図書館のことで知ってほしい事を、クイズや説明という形で資料を作りました。資料は、その日限りではなく今後も何かの説明時に使用できるよう意識して作成されています。クイズでは、本の背に張ってある色テープの意味などを問題にし、正解とともに解説して、図書館の意図を宣伝したのです。

今後も見学や児童サービスについて知りたい人向けに資料を活用する予定です。

⑤講演会・イベント

１１月１日に開催したサラダホール２０周年記念行事、“ありがとう２０周年～とれたて！サラダフェスタ”）において、各種イベントを展開しました。

３子ども読書に関わる団体への働きかけ

①スタンプカードのことを学校図書館司書にお知らせしたところ、「自分の学校でも、スタンプカードを作り、渡してもいいですか？」と問い合わせがありました。これがきっかけで、スタンプカード用原稿を作成・配布ました。この司書の一言がなかったら、このような展開に広がらなかったので、感謝し切れない気持ちでいっぱいです。

その後、小学校１校、公立幼稚園１園、私立幼稚園がカードを作成した模様です。図書館にスタンプしに子どもたちも大勢訪れるようになりました。

はんこは、業務用行事スタンプを活用しています。毎月図柄が変わるので、子どもたちも「次はどんな絵かなあ」と楽しみにしてくれるようになりました。

②「生命保険協会」の「家族で楽しむ絵本１００ＢＯＯＫＳ」情報をお知らせ

この３０部ほどパンフレットを各機関に配布。ぎりぎりの部数でした。このとき思いつかなかったのですが、地域文庫等にも知らせるべきだったと反省しました。

③「講談社おはなしキャラバン」のお知らせ

８月上旬に、講談社おはなしキャラバンが、「大阪方面に１１月巡回する」との情報を得ました。が、締切日は数日後。すぐに教育機関にお知らせしました。学級閉鎖の影響でできなかったのですが、巡回を申し込んだ小学校があったそうです。

④初任者研修

阪南市では、小中学校の新任教員には「社会体験研修」が課せられています。図書館では、夏休みの２日間に各グループに様々なプログラムをこなしています。

「教え子」ではなく、地域の子どもと接し、読書の世界の楽しさを伝えるノウハウや具体的に本を手に取りどんな本が良いかを勉強し、「おはなし会」に臨んでもらっています。このような体験を経ることで、教室での読み聞かせの効果や有益さを実感して下さるようです。

最後に

次のステップとして、５年後の「評価」に向け、今年度中に委員会を立ち上げ、起動したいと考えています。

「子読推」を１年間血の汗をにじませて策定した結果、今では、日常においても、「この情報は、他の組織にも知らせるべきではないか」ともうひとがんばり考えたり、「この情報は、本とは直接関係ないが、読書環境に関わる社会的動きではないか」と注目したり、思考レベルに広がりが出たように感じます。

「ノーテレビ・ノーゲームデイ」については、埼玉県や京都市、小さな市町村など既に自治体をあげて取り組んでいるところを見るにつけ、社会がそういう風向きになればと切望します。今自分たちでできる事はせいぜいクラブ―例えば“ノーメディア（ノーＴＶ・ノーゲーム）倶楽部”を始めましょうと呼びかけ、「メディアに振り回され時間を食われるのではなく、コントロールしてうるおいある生活を取り戻し、能動的に暮らしましょう」と狼煙をあげたいというのが、今の３人の思いです。

以上で報告を終わります。全体をとおして見ると色合いの異なる文面になってしまいましたが、最後までお読みくださり、ありがとうございました。